令和７年度入学試験問題（後期日程）

小　論　文

初等教育教員養成課程
人文・社会教育プログラム

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には必ず受験番号を記入すること。

〔問〕　以下の文章は、大江健三郎のエッセー『「自分の木」の下で』の中の「本を読む木の家」の章です。これを参考にして、小学生に「どのように本を読む指導をするか」に関して、あなた自身の考えを６００字から８００字以内で述べなさい。

「本を読む木の家」

子供の時、いろいろ本を読むための工夫をしました。中学校のなかばから終わりにかけてのころで、自分の読みたい本がなんとか手に入るようになってのことでした。もっとも、本が面白いから、というのでもなかったのです。読みはじめればすぐ夢中になるような本だと、工夫はいりません。ところが、先生や年上の友達から話を聞いて、読んだ方がいい、読みたい、とやっと手に入れたのに、実際とりかかってみると読み続けにくい本がありました。

自分で読んでみて、これは立派な学者や作家が書いた本にはちがいないが、自分にはムカない、とわかる本ならいいのです。読むことをあきらめるか、後に延ばすかします。もう、そうした本をいれる本箱も持っていました。もっと成長して、その本が面白くなった時に読めばいいし、それでも興味がわかなければ、自分の責任だ、と考えればいいのです。

ところが、自分でもこれは読んだ方がいいとわかるのに、なかなか続けて読むことのできない本がありました。いますぐ思い出すのは岩波文庫のトルストイの日記です。そして私には、どんな本でも十ページ読んでから最後まで読めないのは、ハジだ、という思いこみがあったのでした。

そこで工夫が必要になるのです。私はそういう特別な本を読むための場所をつくりました。家の裏から川原（かわら）に降りるまでの平たい場所に、母親が畑を作っていました。ある時、私が翻訳の子供の本で、重そうな球体の野菜の名前を知って、――百歳まで生きて、いつかはキャベツを食ってやる！といいましたら、人に頼んで種子（たね）を分けてもらい、一応は本に書いてあったとおり葉を巻き込んだ丸い野菜を作ってくれました！

戦争なかばからの食糧不足で、母が畑にした場所は――後では小麦を蒔(ま)きました――、もともと柿の木が植わっていたところです。石垣を積んで川原から段差をつけた畑のへりには、ビワとイチジクの木。春になって植物が芽ばえ、その若葉が一日でどれほど生き生きと伸びるものか、私が新鮮な気持ちで観察したのは、祖父や父も品種の改良に加わっていたのらしい、この小さな柿畑でのことでした。

ビワの木に子供が登ってはいけない、という言いつたえが村にあって、どうやって実をとるかを弟と苦心したものです。ある年、イチジクの実が終わってしばらくたった後、ガサガサと乾いた音のする葉かげにひとつ、信じられないほど大きい実を見つけて、「人生」はいいものだと、実際にこの言葉を頭に浮かべたこともありました。

それらの果樹からわずかに抜きん出ているカエデの木があって、私は幹が幾股(いくまた)にも分かれているところに板をしき、縄で固定して、その上で本を読むことのできる「家」を造ったのです。

ずっと後になって、テレヴィの仕事を引き受けた私は、原爆、水爆をどのようになくしてゆくか考えている、世界あちらこちらの人たちに話を聞きに行きました。プリンストン高等研究所で会った物理学者フリーマン・ダイソンには、仕事の話がすむと、その人の息子さんのことを聞きました。高い樹木の上に家を造って住んでいる、と新聞で読んだことがありましたから。

――息子は木からおりた。いまはアラスカの海で、先住民のカヌーを改造したものに乗っている、とダイソンさんは楽しそうに答えました。

さて私は、その木の上の本を読む家で、例の、なかなか読み続けられない本を読むことにしたのです。そうでなくても、一日に一度は、木の上の家の具合を調べなければなりません。その際には、この本を持って木に登る。そこでは他の本は読まない。そうすると、いつの間にか、次のやはり難しい本に移ることができている、というふうになったのでした。

いまの私にとって、本を読む木の家の代わりをしているのは、電車です。大人になると、これは大切な本だということが、経験によって正確にわかるようになります。それでも、やはり読み続けることの難しい本はあるのです。私は週に幾度かゆく水泳クラブへの電車で、そのような本を読みます。水着とゴーグルをいれたリュックに、その本と、それが外国語の本ならば辞書と、書き込み用の鉛筆しかいれておかないの

で、電車に乗ってしまえばその本を読むことになります。そのうち、水泳を始める前にクラブの談話室で読み続けるようになれば、もう心配はありません。

そのようにして電車に乗り合わせる中学生や高校生諸君が、しばしば漫画雑誌を読んでいるのを見かけます。そうした面白いものは、勉強机にむかっていても——授業の間ですらも——読めるのじゃないでしょうか？ほかにすることがなくて、三十分がまんしていなくてはならない時間が、通学の際、毎日二度ずつあるとしたら、その時間を、日ごろは読みにくい本をカバンに入れておいて読むことをすすめます。

（大江健三郎『「自分の木」の下で』［朝日新聞出版］2005年　より）